

沖縄における「ホタル」を利用した遊びについて

岸本 敬¹⁾

Traditional Toys using Fireflies in Okinawa

Takashi KISHIMOTO¹⁾

1. はじめに

2007年11月の新館オープン以来、博物館体験教室や学芸員講座、展示会関連催事などで、数々の郷土玩具関連の体験講座（「マーニ細工」「風作り」「マーニのそり作り」「ソテツの葉の虫かご作り」「ホタルちょうちん作り」など）が開催されてきた。ほとんどの講座が親子対象のものとなっているが、ほぼ毎回募集定員がいっぱいになり、また、大人だけの参加を希望する声も多く聞かれるなど、伝統的な郷土玩具に対する関心の高さがうかがえる。

沖縄の玩具は、「イーリムン^{*1}」と呼ばれ、大きく2つに分けられる。1つは、ユッカヌヒー（旧暦5月4日）前後の数日間だけ開設される玩具市で、大人が子どもに縁起物として買い与える商品玩具で、庶民が購入することは難しい高価なぜいたく品であった。もう一つは、周りにある自然物（木の実、貝殻、木の葉、藁等）を利用した手作り玩具で、「ティンチャミ」（手茶目）または「ティンチャマ」或いは「ティヌガンマリ」と呼ばれていた（大城, 1973:22頁）。これらの郷土玩具がいつごろから作られはじめたかは記録も伝承も乏しく、詳細は不明だが、比較的高度の技術を要する「張り子」を代表とする商品玩具は、早くても琉球で工芸が盛んになつた17世紀以降ではないかと考えられる。これに対し、周りにある自然物を利用した手作り玩具「ティンチャマ」は、おそらく有史前から子どもの遊びの世界に存在していたと想像される（琉球の文化第三号編集部, 1973）。

当博物館では、郷土玩具関連の資料を約190点ほど収蔵しており、そのうちアダン葉細工の動物（トウ

イグワー、馬グワー etc) など「ティンチャマ」系の玩具に分類される資料は約70点ほどである。そのなかでも特に私の興味がひかれたものが「ホタルちょうちん」という、「ホタル」の光を楽しむために作られた玩具資料である。

本稿は、「ホタル」という身近な昆虫（自然物）を利用した遊び、そしてその淡く美しい光をさらに楽しむために作り出された「ホタルちょうちん」についての紹介と若干の考察である。

なお本稿におけるホタルの分布や種類、出現時期などに関する記述については、『沖縄のホタル 陸生ホタルの飼育と観察』（深石, 1997）を主な参考文献としている。

2. 「ホタル」について

1) ホタルの種類

日本で「ホタル」といえば、初夏の風物詩ともとらえられている。これは、本州以南の日本本土各地に分布し、成虫が5月から7月にかけて水辺に出現するゲンジボタルを指すことが多い（大場, 1994）。ゲンジボタルは幼虫が水の中で生活する「水生ホタル」で、「水生ホタル」はゲンジボタル、ヘイケボタル、沖縄県久米島に生息するクメジマボタルの3種だけである。日本には約45種類のホタルが記録されているが、大部分のホタルは、幼虫が陸でくらす「陸生ホタル」であり、また、その半数近くは沖縄県に分布している。その代表的なものとして、「クロイワボタル」、「オキナワスジボタル」、「ミヤコマドボタル」、「ヤエヤマボタル」、「オオシママドボタル」などがあり、成虫の出現時期も必ずしも夏だけとは

1) 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan

限らない（深石前掲：2～3頁）。

2) 文化との関連

夜、淡い光を放ちながら飛行するホタルは、古来から愛されてきた昆虫の一つで、故事成語の「螢雪の功」でも有名なようにホタルを題材とした文化も多い。

① 日本本土

「夕されば 螢よりけに燃ゆれども 光見ねばや人のつれなき（紀友則、古今集・562）」など平安時代に詠まれた短歌にも、ホルの火（光）を人間の燃える恋心に喩えたようなものが残されている（田中、1994）。また、その歌詞「ほーほー ほたる来いあっちの水は苦いぞこっちの水は甘いぞ ほー ほー ほたる来い」で知られる童謡「ほたるこい」も古くから日本全国で親しまれてきたものである。

② 沖縄

日本産ホタルの半数近くが分布する沖縄でもホタルは身近な昆虫であり、「ジンジン」（沖縄島）、「ヤーンブ（宮古島）」、「ジンジンパーレー」（石垣島）などの呼び名で親しまれている。

琉球王国時代の琉歌にもホタルが登場する作品がいくつか残されている。その一つ「思い焦がれれば夜夜の螢火もわが身から出だる光ともて」は、恋に身を焦がす苦しい心情を螢の火（光）に喩えたものであるが、他の作品もほとんどが同様の心情を螢の火（光）に喩えて詠みこんだものである（島袋・翁長、1968）。

また、童謡「ジンジン」も地域によって若干歌詞に違いが見られるが、沖縄島周辺で広く親しまれている。さらに、資料1の宮古島の童謡のように、沖縄島と異なる独特の内容をもつ歌もある。歌詞中の「ぶーんめ（芋を績め）」には、「空を気楽に飛びまわる螢に、少しでも自分の

やーんぼー やーんぼー	螢よ螢
まーすー ひとうちいが	塩を一升
ふいーつじやー	くれるから
やりむいや かつぶいーきし	破れ蓑 <small>みの</small> を被 <small>つ</small> ってきて
ぶーんめ ぶーんめ	芋 <small>いも</small> を績 <small>つむ</small> め 芋 <small>いも</small> を績 <small>つむ</small> め

資料1

仕事を手伝ってもらいたい」という少女の願いが込められている。かつて貢納布である「宮古上布」の生産に忙しかった宮古島の土地柄を表しているともいえる（日本放送協会編、1990）。

2. 「ホタル」を利用した遊び

子どもたちは、身近な自然物（木の実、貝殻、木の葉、藁等）や昆虫などの動物を捕つていろいろな遊びや玩具を考えだした。昆虫を捕るための道具（玩具）も手作りで、バショウのくるっと巻いた若葉（写真1）を、竹ざおなどの長い棒に縛りつけて作ったセミ捕り器（写真2）や、二股になった木の枝を取り取り、それにクモの糸をからませて作った虫捕り器（写真3）などがある。捕まえたセミやバッタなどの昆虫も、ソテツの葉を編んで手作りした虫かご（写真4）に入れて楽しんだ。ここで取り上げる「ホタル捕り（狩り）」も、このような昆虫を利用（？）した代表的な遊びのひとつである。

1) 日本本土

子どもたちにとって「ホタル捕り（狩り）」は、初夏の夜の楽しみのひとつであり、ホタルの捕まえ方を紹介したものとして、「ホタルとりには昔から竹ぼうきをつかいました。ホタルは、ほうきに触れただけで地面に落ちてきますので、そっと触れて落ち



写真1



写真2



写真3

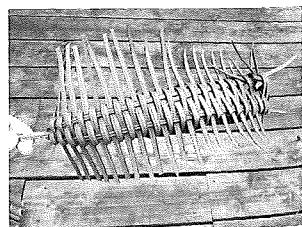


写真4

てきたのを拾うようにしてつかまえます。」（乙益，1993:183頁）などがある。また、捕まえたホタルでどのように遊ぶ（楽しむ）かについても、「その昔、いまのような虫かごがなかったころには、つかまえたホタルは、ホタルブクロの花の中やネギの葉に入れたり、草の葉やムギわらで編んだ小さなかごに入れて持ち帰ったものです。中のホタルが光ると、まるで行灯のようにかすかに輝くのは、ほんのりとするものです。」（乙益前掲：68頁）と紹介されている。ここにある「ホタルブクロ」と「ムギわらで編んだ小さなかご」についてもう少し詳しく見ていくと、次のようになる。

○ホタルブクロ

「ホタルブクロ」とは、日本本土各地の山野などでよく見られるキヨウ科の多年草で、6月から7月ごろにかけて大きな釣鐘型の花を咲かせる（図1）。その名の由来には諸説あるようだが、子どもたちが捕まえてきたホタルをその花の中に入れ、そこからこぼれる淡い光をながめて遊んだことから名づけられたとの説が知られている（林編，2009）。

○ムギわらで編んだ小さなかご

この文献（乙益，1993）では、かなり小さくて簡単に作れる麦わらの虫かご（図2）が紹介されている（乙益前掲：68頁）。全国（沖縄を除く）どこにでも伝わっている一般的なものは、もう少し本格的に編みこんで作る図3のよう



図1

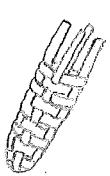


図2



図3



図4

ものである。これらは麦を収穫する5・6月頃、麦わらをもらった子どもたちが編んでいたもので、ちょうどこの頃に熟れるクワの実などを摘むときの入れ物としても使われたようである（佐藤，1994:47～49頁）。また、四角い独特な形状をしたもの（図4）を作る地域もある（佐藤前掲：54～61頁）。

ホタルブクロの花が咲く時期や麦の収穫時期がちょうどホタル（ゲンジボタル）の成虫が出現する時期と見事に一致しており、身の周りにある自然物をうまく利用してホタルの淡い光を楽しんでいたことが感じられる。

2) 沖縄

沖縄の子どもたちにとってホタルは格好の遊び相手（道具？）であり、「ホタル捕り（狩り）」も沖縄全域で行われていた。草に止まっているホタルを両手で包み込むように捕る^{*2}ほかに、飛んでいるホタルを竹の枝（葉）やクバオージ（ビロウの葉でつくった団扇）で打ち落としたり^{*3}、風であおってバランスを崩して落ちたところを捕まえた^{*4}。クバオージを使うというところが、沖縄独特の趣があって面白い。ただ、捕まえたホタルを何に入れて遊ぶ（楽しむ）かについては、地方によって違いが見られる。その違いについて調べてみると、地方ごとに生息するホタルの種類や成虫の出現時期、身近にある植物の違いなどが密接に関わっているようで大変興味深いものがある。沖縄の「ホタル捕り（狩り）」について、その楽しみ方（入れ物）の違いなどを、①沖縄島及びその周辺、②宮古諸島、③八重山諸島（石垣島・竹富島）の3つの地方に分けて見ていきたい。

① 沖縄島及びその周辺

子どもの遊びについて記述した市町村誌や字誌はあまり多くないが、「ホタル捕り（狩り）」のことを「ジーナー（ジンナー）トゥエー」と呼ぶ地域が多い^{*5}。また、そのいくつかにおいて「夏の夜に・・・」と記述されていることからも、夏の遊び（楽しみ）として認識されていることがわかる。これは、沖縄島で一般的に目にするホタルが、「クロイワボタル」と「オキナワスジボタル」であるからだと思われる。2種類とも、5～11月（最盛期は5月）にかけて畑

周辺などに出現するもので、比較的小型のホタルである（深石前掲：24～25頁）。私自身、今年7月の学芸員講座「子どもの人生儀礼と遊びーホタルちょうちん作りー」に向けての準備の一環として、6月中旬頃、子どもたちと自宅近くの弁ヶ嶽に「ホタル捕り（狩り）」に出かけた。夕暮れ時から弁ヶ嶽に入り、暗くなるのを待っていると地面のあちこちに淡い光があるのに気づいた。ライトを照らしてみると、ホタルの幼虫がカタツムリを食べている姿を目にすることができた。地面で発光する幼虫の数は結構多かったので、飛翔して発光する成虫もかなり出現するのではないかと期待も高まったが、約1時間半の間に現れた成虫は6匹ほどであった。2匹ほどを空中で捕まえることができたが、大きさや体の特徴から「クロイワボタル」であったと思われる。

そして、捕まえたホタルを何に入れて遊ぶ（楽しむ）かというと、次のようなものが挙げられる。

i サツマイモの中

ふかしたサツマイモをよく練って、薄く団子状にしたものに窪みをつけ、その中にホタルを入れて闇夜に浮かび上がる青白い光を楽しむ。

ii ユリ（テッポウユリ）の花の中

iii ガラス瓶の中

上記 i の「サツマイモの中」は、『那覇市史』においては「ジンジンビー（ホタル火）」と紹介されており、沖縄島全域及び座間味島の記録に見られる⁶。私の母（名護市出身、1933年生）を含め沖縄島出身の複数の方からも同じ話を聞くことができ、最も一般的な遊び（楽しみ）方であったと思われる。戦前までも沖縄の庶民の主食であり、最も身近な農作物であった「サツマイモ」を、ホタルの淡い光を楽しむのに利用しているのは、非常に沖縄らしさがにじみ出でていて面白い。ii の「ユリ（テッポウユリ）の花の中」⁷は、テッポウユリの開花時期が春であり（池原、1979）、「クロイワボタル」と「オキナワジボタル」の最盛期ともほぼ一致している。前述した日本本土の「ホタルブクロ」の例と同様に身近な植物をうまく利用しているといえる。iii の「ガラス

瓶の中」⁸は、農村地域でもガラス製品が手軽に入手できるようになってからと考えられ、人々の日常生活の一端が垣間見えるようで興味深い。

② 宮古諸島

沖縄島から約300km離れた宮古諸島では、ホタルは「ヤーンブ」と呼ばれている。「ヤーンブ狩り」も子どもたちに人気のある遊びの一つであるが、捕まえたホタルを何に入れて遊ぶ（楽しむ）かについては、沖縄島や八重山諸島にはみられない宮古独特の特徴がある。何を入れ物の材料として使用するかというと、「テリハボク」の実（写真5）である。「テリハボク」は熱帯アジアに分布する常緑高木であり、宮古では「ヤラウギー」と呼ばれる。台風や潮風に強いので、昔から海岸沿いや屋敷の防風林などに用いられ、現在でも沖縄全域で街路樹などとしてよく植えられている樹木である（天野、1989：216頁）（写真6）。

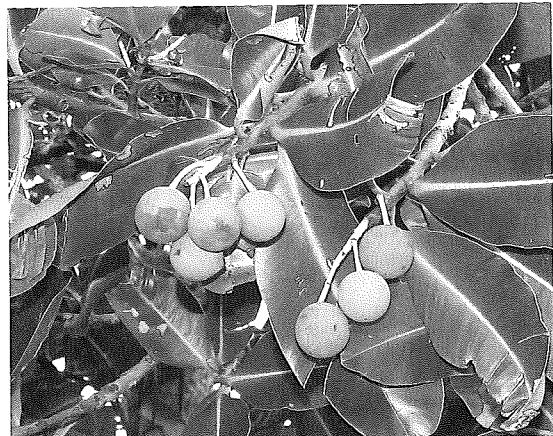


写真5



写真6

当館に収蔵されている「ホタルちょうちん」もこの「ヤラウギー」製であり、宮古島市久松在住の瑞慶山春氏（1927年生）が、平成6年に開催された沖縄県立博物館特別展「子どもの世界」に際して作製・寄贈したものである（写真7）。2011年11月、宮古島で瑞慶山氏に直接お会いし、この「ヤラウギー」製の「ホタルちょうちん」についていろいろと話を伺う機会に恵まれた（写真8）。

それによると、この遊びをやっていたのは、瑞慶山氏の少女時代でもある戦前の1930年代頃までだろうとのことであった。同席していただいた瑞慶山氏の長女である二木成子氏（1948年生）も、この遊びについて全く知らないとおっしゃっていたことからも、戦後には姿を消してしまっていたと考えられる。地域的には、海で隔てられた伊良部島でも同様の遊び方をしていましたので、宮古諸島のかなり広い範囲でこの遊びが行われていたと考えられる。また、瑞慶山氏は「はっきりとした時期は覚えていないが、花が咲いて実がたくさんできる時によく遊んだ。夏頃だったような気がする」とおっしゃっていた。宮古島に生息する「キイロスジボタル」と「ミヤコマドボタル」の成虫出現期は、前者が5月上旬～11月、後者が周年（5月上旬に多い）である（深石前掲：27～29頁）ので、両者とも「ヤーンブ狩り」の対象になっていたと思われる。この「ヤラウギー」製の「ホタルちょうちん」も身近な植物をうまく利用したものであるが、沖縄島や八重山の「ホタルちょうちん」と違う大きな特徴は、作るのに少し手間はかかるが、使い捨てではなく保管して何度も使える

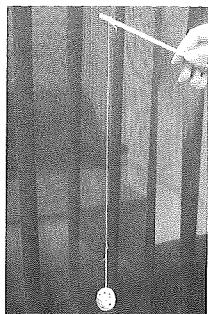


写真7



写真8

（楽しめる）という点である。

また、沖縄島の「サツマイモ」や八重山の「ハスノハギリ」を利用しての遊び（楽しみ）方を紹介したところ、全く知らないということであった。「ハスノハギリ」については、実物（ハスノハギリの総苞）の写真（写真9）も見ていただいたが、「見たことがない」とのお答えであった。翌日、旧城辺町の新城海岸で立派なハスノハギリ林（写真10）を見ることができたが、宮古島で「ハスノハギリ」は、海岸沿いの一部の地域に植えられていただけで、旧平良市内に住んでいる方々などにはほとんどなじみがなかったようである。

③ 八重山諸島

沖縄島から約430km離れた八重山諸島でホタルは、「ジンジンパーレー」（石垣）、「ジンジンバー」（川平）、「ピッカラ」（竹富島）などと呼ばれ、一般的に目にする種類として、「ヤエヤマ（ヤエヤマヒメ）ボタル」や「キイロスジボタル」、「オオシママドボタル」が挙げられる。沖



写真9



写真10

縄島や宮古諸島と同様「ジンジンパーレー狩り」は子どもたちの楽しみの一つであり、捕ったホタルの入れ物も八重山特有のものがある。

南島研究の先駆者として知られ、「天文屋の御主前」と呼ばれて親しまれた岩崎卓爾（三木、1983）は、「石垣島地方 四月初旬より蛍發生し、八重山姫蛍 魁^{さきがけ}となり、姫蛍中堅となる、八月中旬イワサキ蛍、これが殿^{しんがり}となりて十二月上旬冬眠状態に入るが如し、児童歌を唄いつゝ、イワサキ蛍を狩り、方言『ホタルキウ』学名『ハスノハカリ』の老熟したる結実の内肉を抜去し提灯と称へ、蛍を集め書を読み字を習ふ、其光淡青温雅愛すべし。」（岩崎、1912）と述べ、「ホタル捕り（狩り）」及び「提灯（ホタルちょううちん）」について紹介している。「蛍を集め書を読み字を習ふ」の部分は、まさにあの有名な故事成語「螢雪の功」と一致するものであり、ホタルの入れ物が「絹の袋」から「ハスノハカリ」に変化しているところが大変面白い。

1974年に竹富島を訪れた司馬遼太郎も、「密林の浜よりの縁辺で潮風を防いでいる樹も、風変わりな樹だった。『学名は知りませんが、土地の子供たちは提灯の木といいます。戦時中、履物がなくて困っていたころは、この木で下駄を作りました。だからゲタの木ともいいます。また昔はこの木でお面を作りましたから、お面の木という人もいます。』…。実はピンポン玉大で、… 実の実体は硬質の皮のみで中は空洞になっており、… 中に黒くちっぽけな種子が入っているのは、よくできたマンガのような愛嬌がある。… 『これにホタルを入れるのです』オート三輪の運転手がいった。ホタルを3匹も入れると相当かかる。闇夜などに、子供が群れて浜を歩くとき、前をゆく子がこの『提灯』を頭上にかざしていれば、誘導をあやまるこはないにちがいない』（司馬、1978）と述べている。

この「ハスノハカリ」は熱帯アジアに分布する常緑高木であり、八重山諸島では「トゥカナズ」（川平）、「トーナチ」（竹富島）などと呼ばれている。「テリハボク」同様、台風や潮風に強いので、昔から防風林・防潮林など

に用いられてきた（天野前掲：86頁）が、各地の御嶽でもよく目に見る樹木である^{*9}。また文中に登場するホタルの種類については、「八重山姫蛍」は「ヤエヤマホタル」（深石前掲：30頁）、「姫蛍」は「キイロスジホタル」（深石前掲：27頁）、「イワサキ蛍」は「オオシママドホタル」（深石前掲：32頁）になるのではないかと思われる。

八重山諸島で行われてきたホタルを利用しての遊び（楽しみ）について、経験者の方に実際に話を伺うことができた3つの地域（i 竹富島、ii 石垣市川平、iii 石垣市白保）に分けて述べてみたい。

i 竹富島

2011年10月と11月の2度にわたり、浄土宗本願寺派喜宝院の住職であり竹富島の文化にも詳しい上勢頭同子氏（1947年生）に話を伺った。要約すると次のようになる。

○竹富島でホタルは「ピッカラ」と呼ばれています、意識して見ているわけではないのではっきりとは言えないが、季節的には一年中目にしているのではないか（5～6月に多い？）。

○遊び方は、捕まえたホタル（種類は不明）2～4匹を「トーナチ」（＝「ハスノハカリ」）の実の中に入れ、「提灯（ホタルちょううちん）」としてみんなで真っ暗な海岸を歩いたり、木にかけて「ユーレイ遊び」をした。また、ハブのいそうな茂みを歩く際の懐中電灯代わりにもした。

○「提灯（ホタルちょううちん）」は、「トーナチ」の実（総苞）の黒い種子を取り出し（写真11）、中にホタルを入れ（写真12）、小さく切った障子紙や習字紙を少し水（唾液）で濡らしてフタとして貼り付ける（写真13・14）。

○昭和30年代までこの遊びをやっていたと思うが、それ以後は全く見かけなくなっている。

○「トーナチ」は集落内にはないが、海岸近くに結構生えていた。軽くて柔らかく加工しやすいので、正月用の下駄（ゲタ）の

材料でもあった。また、実などには毒があり、この木の近くで獲れたヤシガニは食べてはいけないと言われている。

○沖縄島の「サツマイモ」や宮古の「テリハボク」を利用しての遊び（楽しみ）方は全く知らない。

以上のようなものであるが、特に宮古の「テリハボク」の実を利用した「ホタルちょうちん」には興味深々のご様子であった。

「ヤラボ」と呼ばれる「テリハボク」は、竹富島でも身近な樹木であり、他の地方と同様にその実で笛を作つて遊んだりしたが、ホタルの入れ物として利用することは、聞いたこともないし、全く思いつきもしなかつたということであった。さらに、屋外でそのような話を伺つてゐる最中（10/11）に大変な幸運にもめぐり会えた。午後4時頃、私たち2人の前に何か虫らし

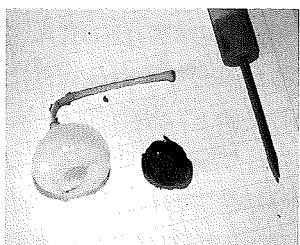


写真11



写真12

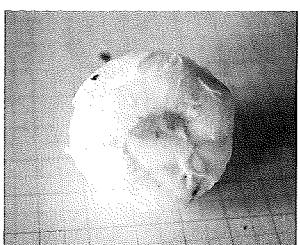


写真13

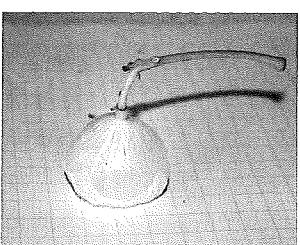


写真14



写真15

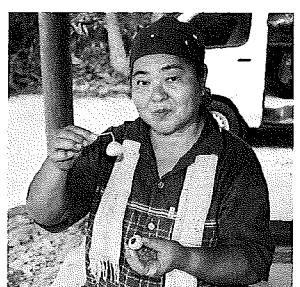


写真16

きものが飛んできて、近くの葉っぱにとまつた。その虫をみた上勢頭氏が、「ほらこれがピッカラさあ」と叫んだが、私は「まさか、何かと見間違つてゐるのだろう」としか思ひなかつた。なぜなら、その虫の大きさが私の知る範囲のホタルの倍以上の大きさであったからである。半信半疑のまま、葉っぱにとまつたその虫をそつと手にとつてみると、何と下腹部が光つてゐるのである（写真15）。まぎれもなくホタルであり、その大きさと光の強さに驚くばかりであつた。早速もつていた「トーナチ」の実（総苞）で、上勢頭氏に御教示いただきながら「提灯（ホタルちょうちん）」を作ることができた（写真11～14・16）。半透明のその「トーナチ」の実（総苞）の中で、ホタルは間隔をあけながら持続的に強い光を放つのであるが、日暮れ前にもかかわらずその淡く青白い光を感じることができた。複数（2～4匹位）のホタルを入れた「提灯（ホタルちょうちん）」が、真っ暗闇の中で淡く青白い光を浮かびあがらせる光景を想像するだけで幻想的であり、その光で字を読むことも不可能ではないのではないかという気がした。

ホタルに戻り種類を確認すると、その姿の特徴や大きさなどから「オオシママドボタル」であることが確認できた（深石前掲：32頁）。そして、上勢頭氏の年中ホタルを目にするという話からすると、秋から冬にかけて目にするのが今回遭遇した「オオシママドボタル」、春から秋にかけて目にするのは「キイロスジボタル」になるのではないかと考えられる（深石前掲：40～41頁）。また、「トーナチ」（＝「ハスノハギリ」）



写真17



写真18

も、竹富東港近くの竹富島ゆがふ館（ビジターセンター）前の庭（写真17）やコンドミ浜入り口（写真18）に大きな木が生育しており、上勢頭氏の言葉通り、昔から人々にとって身近な植物であることがうかがえた。「オオシママドボタル」の出現時期と

「トーナチ」の実（総苞）の成熟期（天野前掲：86頁）もほとんど一致していることからも、季節に応じて身近な自然物（植物・昆虫）をうまく利用した実に趣のある遊びに思えてならない。

ii 石垣市川平

『石垣市史』（石垣市史編集委員会編、2007：886頁）や『八重山生活誌』（宮城、1972:339頁）などで「ホタルちょうちん」が紹介されている。石垣市在住の方々にも依頼して、石垣市登野城など古くからの市街地で「ホタルちょうちん」で遊んだ経験のある方がおられないか調べてみると、なかなかそのような経験のある方の情報を得ることはできなかつた。しかし、2011年11月の調査で、「自分がやつたことはないが、川平のほうでやつていたことは知っている。」と80代半ばの女性の方がおっしゃっているとの情報を得ることができた。その日（11/21）の夕方、石垣島西部の川平へ移動し、集落内を中心にホタルの姿を探してみた。すると、宮鳥御嶽近くの茂みで、10mほど離れた場所からもはっきりと確認できる小さな光が、空中を移動しているのが見えた。近づいて、草かげにとまつたその光をそつと手にとってみると、まぎれもなくあの「オオシママドボタル」であった。約1時間半ほどの時間のなかで目につくことができたのはこの1匹だけであったが、天候など

も考え、多くの場所を丹念に探せば、遭遇する確率はもう少し上がるのではないかと思われた。さらに翌日、再び川平で、「ホタルちょうちん」を作つて遊んだ経験があるという仲間セツ子氏（1930年生）にお会いし、次のような話を伺うことができた（写真19）。

○「ハスノハギリ」は海岸近くによく生えている身近な樹木で、川平では「トウカナズ」と呼んでいる。

○ホタルは「ジンジンパー」と呼ばれ、その時期（あまり覚えていない）になると、家の近くや畑などでたくさん目にしていた。

○幼い頃（10歳前後？）、近所のお姉さんたちと一緒に「トウカナズ」の熟して大きくなつた実（総苞）で「提灯（ホタルちょうちん）」を作つて遊んだ。真っ暗闇の中を、「提灯（ホタルちょうちん）」を持った人を先頭にして列を組み、唄を歌しながら歩いた。意地悪な男の子がその列の前に立ちはだかって邪魔をするが、それを通り抜けたりするのが楽しかつた。

○「提灯（ホタルちょうちん）」は、2つの「トーナチ」の実（総苞）の中の黒い種子を取り出し（写真20）、一つの実の中にホタルを入れ、もう一つの実を下からかぶせて作った（写真21）。

○はっきりとは言えないが、特に戦後にになってからは川平でも子どもたちがこの遊びをしている姿をみかけたことはない。

○沖縄島の「サツマイモ」や宮古の「テリハボク」を利用しての遊び（楽しみ）方は全く知らない。

川平において「トウカナズ」（＝「ハスノ



写真19



写真20



写真22



写真23

ハギリ」)はかなり身近な樹木であり、川平湾のすぐ近くに位置する浜崎御嶽にも大きな木が4～5本生育している(写真22)。撮影したこの日(11/22)も、白っぽく半透明に熟した実(総苞)が鈴なりに実り(写真23)、下の砂の上にも相当数の実(総苞)が落ちている状態であった。この2つの実をうまく組み合わせて「提灯(ホタルちようちん)」として遊んで(利用して)きた先人(子ども)たちの知恵には、発想の豊かさと同時に、暗闇の中でその淡く青白い光を愛でる風流な心の響きを感じずにはいられない。

iii 石垣市白保

2011年11月の調査を進めるなかで、新たな発見もあった。石垣島東部の白保では、それまで調べた市町村誌などの文献では見られない素材(方法)で「ホタルちようちん」を作つて遊んでいたということで、その経験者である前盛チヨ氏(1928年生)にお会いし、次のような話を伺うことができた。

○ホタルは「ジンジンマヤー」と呼ばれ、その時期(あまり覚えていない)になると、家の近くや畑などでたくさん目にしていた。

○子どもの頃(1930年代)、海岸の砂浜によく生えている「サチフカ」(白保方言)の幹を切り取り、その表皮をはぎ取る。さらにその内部のうすい皮(膜)を丁寧にはがしていくと、うすい半透明な皮(膜)が筒状にはぎ取れるので、その一方を結んで袋状にする。その中にホタルを何匹か入れ、

「ジンジマヤーちようちん」と言って、その光る様子を楽しんだ。この袋状にしたものに水を入れ、簡単な水筒代わりにしたり、「水風船」としても遊んだ。

○この「サチフカ」のうす皮(膜)は、行事の際に料理を包んだりするのにもよく使っていた。

○はっきりとはわからないが、戦後しばらくして電気が普及し始め、ビニール袋など

も簡単に手に入るようになってから、「サチフカ」製の「ジンジマヤーちようちん」を作つて遊ぶこともなくなった気がする。○「ハスノハギリ」や「テリハボク」は白保でも身近な植物であるが、「ホタルちようちん」を作つて遊んだことはなく、聞いた覚えもない。「サツマイモ」も同様である。

白保方言でいう「サチフカ」は、「ハマオモト」(写真24)のこと、別名「ハマユウ」とも呼ばれ、沖縄全域の砂浜などでよく目にする植物である。前盛氏は庭で鉢植えにしている「サチフカ」を切り取り、「ジンジマヤーちようちん」の作り方を実演してくださった。砂浜に自生しているものとは大きさや形状が少し違っているらしく、筒状にはぎ取ることはできなかった(写真25)が、イメージをつかむには十分であった。この「サチフカ」製の「ジンジマヤーちようちん」も身近な植物をうまく利用したものであるが、面白いことに『石垣市史』(石垣市史編集委員会編前掲:891頁)や『竹富島誌 歌謡・芸能篇』(上勢頭, 1979)、『八重山生活史』(宮城前掲:327～328頁)においては、「水風船」などとして遊んだと紹介され、「ホタルちようちん」としての記述は見当たらない。竹富島や川平など他の地域でも白保同様に「ホタルちようちん」としての利用がされていなかったかも調べてみる必要があると思われる。また逆に、白保で「ハスノハギリ」は川平と同様に身近な樹木であり、「ハスノハギリ」製の「ホタルちようちん」について何らかの記憶があるのではないかと思ったが、前盛氏にそのような記憶はないということは意外であった。ただ、こ



写真24

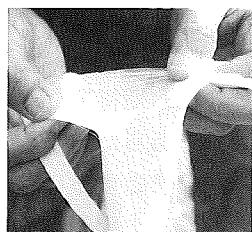


写真25

れについても複数の方々からの聞き取りが必要であることはいうまでもない。

3. おわりに

以上、「ホタルちょうちん」を中心に沖縄における「ホタル」を利用した遊びについて述べてきた。この遊びの大きな特徴は、暗がりのなか光を放ちながら飛翔する生き物「ホタル」を追いかけて、夕暮れから夜にかけて行われることである。子どもたちにとって、他の遊びとはひと味もふた味も違うものだったに違いない。さらに、捕れた「ホタル」を自分で手作りした入れ物（「ホタルちょうちん」や「サツマイモ」）に入れ、その淡く幻想的な光を楽しむという、ある意味遊びを超えた不思議な気持ちにもなったのではないかと想像される。そして、特に電気の普及していない時代、夜の暗がりのなかで輝くその淡く幻想的な光は、子どもたちだけでなく大人たちにとってもひとときの心の癒やしになっていたのではないだろうか。

また、この入れ物の素材について、各地方や各地域によってかなりの違いが見られることは興味深いものであった。ただ共通しているのは、その地方や地域の人々にとって身近な自然物（植物）を素材として利用しているということである。どれをとっても、その素材選びから作り方まで、「ホタル」の放つ光をより一層幻想的で美しい光として楽しむための知恵や工夫がつめこまれており、発想の豊かさを感じずにはいられない。

今回の白保での聞き取り調査で今まで知らなかつた事例が判明するなど、体験者の方々の話を伺うことによって、遊び方や作り方の細かい工夫など文献ではわからない情報を得ることができたのは大きな収穫であった。実際本稿の執筆にあたり、いくつかの市町村史や字誌などで「子どもの遊び」について調べてみると、それ自体の記述がないものが少なくなかった。よって、多くの地域での聞き取り調査を進めていくことによって、さらに新たな事例を確認することができる。機会があれば、その一部分でも稿をあらためて言及したい。

小稿をまとめるとあたり、新城富士子、池原盛浩、石垣久雄、上勢頭同子、大仲朝江、久高健、瑞慶山昇、瑞慶山春、田中聰、仲間セツ子、二木成子、前

盛江里、前盛チヨの諸氏にはさまざまにご教示、ご援助いただいた。厚く御礼申し上げる。

【脚注】

* 1 伊波普猷は「玩具を意味する琉球語の *yiri mun* は、貴い物の義から転じたものである。」（伊波、1930）と述べている。また、大城精徳は、日本の古語「いらう（弄う）＝もてあそぶ」と「もの」が合体して「いらうもの（弄う物）」、つまり方言の「イーリムン」になったと述べている（大城前掲：20頁）。

* 2～8 別表参照

* 9 名護市の「宮里前の御嶽のハスノハギリ林」は県の天然記念物に指定されている（沖縄県教育庁文化課編 2011）。

【参考文献】

- 天野鉄夫. 1989. 『図鑑 琉球列島有用樹木誌』 沖縄出版
池原直樹. 1979. 「第4巻 海辺の植物とシダ」『沖縄植物野外活用図鑑』 新星図書出版 164頁
石垣市史編集委員会編. 2007. 『石垣市史』各論編民俗下 石垣市
伊波普猷. 1930. 「琉球の戯曲に現れた玩具」『旅と伝説 第三郷土玩具号』 三元社（『伊波普猷全集』第9巻 平凡社 164頁）
岩崎卓爾. 1912. 『八重山童謡集』（「ひるぎの一葉」『岩崎卓爾一巻全集』 伝統と現代社 73頁）
上勢頭亭. 1979. 『竹富島誌 歌謡・芸能篇』 法政大学出版局 450頁
大城精徳. 1973. 「—古きよき時代の一 イーリムン（玩具）とティンチャマ（玩具づくり）のこと」『琉球の文化』第三号 琉球文化社
大場信義. 1995. 「ゲンジボタルの生態」『日本の天然記念物』 講談社 768頁
沖縄県教育庁文化課編. 2011. 『文化行政要覧 平成22年度版』 沖縄県教育委員会 115頁
乙益正隆. 1993. 『親から子どもに伝えたい 草花遊び・虫遊び』 八坂書房
佐藤邦昭. 2004. 『身近な草や木の葉ができる 作ろう草玩具』 築地書館
司馬遼太郎. 1978. 『沖縄・先島への道』『街道をゆ

- く6』朝日新聞社 115~116頁
- 島袋盛敏・翁長俊郎. 1968.『標音評尺 琉歌全集』
武蔵野書院 396頁
- 田中登. 1994.『古今・新古今の秀歌100選』偕成
社 168~169頁
- 日本放送協会編. 1990.「宮古諸島編」『日本民謡大
観(沖縄奄美)』 日本放送出版協会 48~49頁
- 林弥栄編. 2009.『増補改訂新版 山溪カラーナン鑑
日本の野草』 山と溪谷社 130頁
- 深石隆司. 1997.『沖縄のホタル 陸生ホタルの飼
育と観察』 沖縄出版
- 三木健. 1983.「岩崎卓爾」『沖縄大百科事典 上』
沖縄タイムス社 259~260頁
- 宮城文. 1972.『八重山生活誌』
- 琉球の文化第三号編集部. 1973.「※伝統玩具特集
にあたって」『琉球の文化』第三号 琉球文化社
18頁

別 表

脚注 No.	参考文献
* 2	・北谷町史編集委員会編 1992 『北谷町史』第三巻資料編2 民俗上 北谷町 77頁
* 3	・読谷村史編集委員会編 1995 『読谷村史』第四巻資料編3 読谷の民俗下 読谷村 520頁 ・西原町史編集委員会編 1989 『西原町史』第四巻資料編3 西原の民俗 西原町 1120頁 ・佐敷町史編集委員会編 1984 『佐敷町史』2 民俗 佐敷町 489頁 ・佐敷町字新里字誌編集委員会編 2000 『字誌新里』 佐敷町字新里区 636頁
* 4	・勝連町字南風原字誌編纂委員会編 2000 『勝連町南風原字誌』 南風原公民館 809頁
* 5	・沖縄県教育委員会編 1973 『沖縄県史』第23巻各論編11民俗2 沖縄県教育委員会 512頁 ・読谷村史編集委員会編前掲 ・勝連町字南風原字誌編纂委員会編前掲 ・北谷町史編集委員会編前掲 ・佐敷町史編集委員会編前掲
* 6	・沖縄県教育委員会編前掲 ・宜野座村史編集委員会編 1989 『宜野座村史』第三巻資料編Ⅲ民俗・自然・考古 宜野座村 702頁 ・読谷村史編集委員会編前掲 ・勝連町字南風原字誌編纂委員会編前掲 ・北谷町史編集委員会編前掲 ・北中城村史編纂委員会編 1996 『北中城村史』第二巻民俗編 北中城村 658頁 ・宜野湾市史編集委員会編 1985 『宜野湾市史』第五巻資料編四民俗 宜野湾市 587頁 ・西原町史編集委員会編 1989 『西原町史』第四巻資料編3 西原の民俗 西原町 1120頁 ・那覇市企画部市史編集室編 1979 『那覇市史』資料編第2巻中の7 那覇の民俗 那覇市企画部市史編集室 794頁 ・佐敷町史編集委員会編前掲 ・座間味村史編集委員会編 1989 『座間味村史』中巻 座間味村 495頁 ・伊差川誌編集委員会編 1991 『伊差川誌』 伊差川公民館 197頁 ・字楚辺誌編集委員会編 1999 『字楚辺誌』 民俗編 字楚辺公民館 360頁 ・佐敷町字新里字誌編集委員会編 2000 『字誌新里』 佐敷町字新里区 636頁
* 7	・宜野湾市史編集委員会編前掲
* 8	・北谷町史編集委員会編前掲 ・宜野湾市史編集委員会編前掲 ・北中城村史編纂委員会編前掲 ・西原町史編集委員会編前掲 ・伊差川誌編集委員会編前掲 ・勝連町字南風原字誌編纂委員会編前掲